

特集／「ただいま おかえり」

「須木を活性化させたい」。「若者が住みたいと思う地域にしたい」。海外へ渡航する船の機関長をしていた夏木さんは、地元に戻ってすぐさまざまな活動を始めた。その一つが、農家民泊。夏木さんの夢の詰まった「夢追い人のくらやみ道場」には、これまで108人の子どもや大人が訪れている。

INTERVIEW

大人は「癒し」を求め、田舎の風景や民家に小さい頃の面影を見ている

子どもは、田舎の全てに驚き感動します。もちろん都会の大人も「アスファルトが少ない」などと驚き、喜ぶ人もいますが、子どもと違うのは「癒し」を求めて来ていること。あくせくした日常から離れ、自分を知っている人がいない田舎で、ゆったりした時間を堪能しています。小さい頃に過ごしたような家に泊まり、「昔は自分の家もこうだった」と昔話ができる場所にもなっているようで、夜は昔話に花を咲かせます。大人は小さい頃の面影に懐かしさを覚え、癒されているようです。

夢追い人の
くらやみ道場

夏木 政和 さん



9 山菜採りの道中に出会った壮大な景色 10 川で水の掛け合い。「寒い」と言いながら何回も出ては入っていく 11 花火を堪能。須木の夜は長い



1,2 ジャガイモ、キュウリなどを収穫し、満面の笑み 3 「軽く引くだけでいい」と夏木さんの指導を受けながら、竹をノコギリで切る 4 山で見つけたカニ。「僕が見つけたー」と言い合う 5 6 人がかりで竹を運ぶ横で、一人がかついで運ぶ夏木さんに「すげー」 6 「米は洗うんじゃない。研ぐんだ」 7 薪に火をつけ羽釜でご飯を炊く 8 「コゲが美味しい」とおかわり



いまならしょうじ
今奈良正吾くん
かわはたりゆうし
川畑隆士くん

農作業と、みんなで入ったお風呂はいい思い出

夏木さんは、本当に面白いお父さんでした。今まで知らないことを、いっぱい教えてくれて、楽しかったです。特に麦の収穫。刈って束ねた麦をかける作業は、勉強になりました。そして、みんなで入ったお風呂もいい思い出です。

さんと「足相撲」が始まった。3人がかりでも勝てない政和さんに、父の強さと威厳を感じたようだ。麦刈り、山菜採りをし、一行は近くの川へ。服を脱いで、川遊びが始まった。夜食を終えると、「みっ

ちゃん宿」に泊まる女子と合流し、田舎道を散策。深い闇に怯えながら足を進める。ライトが照らす鹿の姿には「おっ、いるいる。」と声をそろえ、堪能する6人組。夜の鳥田町に、さわぎ声響いていた。

その後、収穫した野菜を使い自分たちでカレーを準備。空腹を満たすと、政和次に向かったのは、食べごろを迎えたキュウリやジャガイモがある菜園。「これ抜いていいの」と初めは恐る恐るだった6人も、土に触れる喜びを思い出したように、菜園を所狭しと駆けまわる。

三松中の生徒が出会った須木の大自然
農家民泊の一日を追う

夏 夢追い人のくらやみ道場

6人組が過ごした夏の大冒険

田園風景と雄大な山に囲まれる須木鳥田町。「夢追い人のくらやみ道場」は、夏木政和さん、ひとみさん夫婦が営む農家民宿だ。6月19日と20日、この家を訪れたのは三松中の男子6人。「竹を採りにいくぞ」とさっそく案内されたのは、近くの山の中。政和さんの実演を参考に、竹伐りに挑戦。「ヤマヒルに注意」という言葉もお構いなしに、見つけたカニに集中する6人であった。採った竹を協力して運び、食器とそうめん流しの台を作る。次に向かったのは、食べ

TOPIC 先進地に学ぶ農家民泊

先進地では、体験型観光に多くの住民が関わり、旅行者を呼び込んでいます

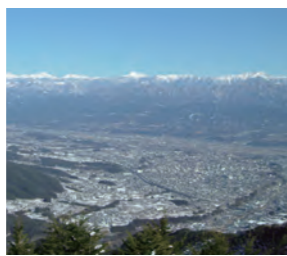
南信州で心温まる感動体験を 感動体験南信州

長野県飯田市

取材協力 (株)南信州観光公社

長野県の最南端に、飯田市と下伊那郡13町村からなる南信州がある。豊かな自然に囲まれたこの地域には、年間約100校、15,000人の修学旅行生が訪れている。

民泊による修学旅行やさまざまな体験活動、営業を一手に引き受けているのは、株式会社南信州観光公社。市町村、JA、金融機関、観光関連会社が出資した会社で、全国に先駆けて、農家民泊というスタイルを作り、教育旅行や、大学のセミナー、会社の研修旅行などを受け入れている。驚くのは体験プログラムの多さ。民泊以外にも、農林業体験、アウトドア・アクティビティ、伝統工芸、味覚体験など、200品目のプログラムを準備している。また、民泊を受け入れる条件は、一泊は地域内の宿泊施設に泊まること。地域経済にも貢献している。当公社設立に関わった藤澤安良さんは、「誘客が進むに連れて、受



け入れ体制の整備と拡大が必要となるが、体験、民泊などのプログラム料、宿泊、飲食、物販、交通など多岐に渡っての経済効果(年間直接収入約4億円)(2012年)が期待できる」と話す。受け入れ側も気楽に取り組めるため、受け入れ農家は400軒以上。インストラクターなども約1,300人に上り、事業に関わる人は数千人に及んでいる。

「過疎高齢化が進み、一次産業の継承が危ぶまれているなか、『体験交流型の観光』の必要性を認識し、いち早く重要政策にしたことが今日に至っている」と藤澤さん。南信州が強く推すのは「ほんもの体験」。お客様扱いをせず、ありのままの田舎生活に飛び込んでもらうという姿勢が、多くの人の共感と感動を呼び、人気につながっている。



老人ホーム
ホームライフひむか 生活指導員
たての
立野 コマ子 さん

ホームの周りを入所者や従業員で散歩をしていたときに、川野輝夫さん宅で農作業をしている子どもたちを見かけました。野菜の収穫を体験していたようでしたが、抜こうとしていたゴボウは、腕ぐらいの太さ。一人でやっても抜かず、2人でやっても抜けそうにありませんでした。思わず一緒になって「がんばれ、がんばれ」と応援。抜けた瞬間は、拍手がわき起こりました。入所者も喜んでいましたが、私たちも楽しませていただきました。

INTERVIEW



教育旅行誘致のプロに聴く

農家民泊ともてなし

宮崎県教育旅行誘致推進事務局
誘致部長

うえの けんいち
上野 憲一 さん

35年間(株)JTBに勤務し、教育旅行を担当。今年5月に発足した教育旅行誘致推進事務局の誘致部長に就任した。

減少する宮崎県への修学旅行生の数
宮崎県への修学旅行生は、ピークが平成2年の5万5千人で、その後減少し、今年は2千500人。平成22年には、口蹄疫と新燃岳の影響から500人まで落ち込みました。他県と比較してみると、平成23年の本県が2千人なのに対し、鹿児島県が9万3千人、大分県が11万2000人、長崎にたつては、48万人です。小・中学生の修学旅行は平和学習を含んでいるため、長崎や鹿児島(知覧)は多くなります。しかし、現在は農家民泊などの体験型観光の需要も増えてきています。今回、北きりしま田舎物語推進協議会が受け入れた修学旅行生たちは皆、星やホテルなど豊かな自然に感動していたと聞いています。この観光資源を活用しない手はありません。しかし、北きりしまと同

様に体験型観光を推進している長崎県松浦市や、鹿児島県南さつま市は、一度に千人、2千人を受け入れています。本県は、北きりしまが約200人、西都市が約100人、高千穂・椎葉が約300人と、全体で600人にすぎません。まずは、受け入れの数を増やすことが課題といえます。
市民総出のおもてなしを
田舎らしいおもてなしで、誰でも取り組めることがたくさんあります。一つのケースですが、旅行者が田舎の子どもたちから元気なあいさつをもらい「平和で、教育がしっかりしている」と感激したという話もあります。提案ですが、修学旅行生の乗った農家さんの車に目印を付け、見かけた人は手を振っておもてなす。地域全体で、「よく来たね」とおもてなすことで、感動を呼ぶ旅行になると思います。



ライフスタイルショップ
サボリバー
saboribar オーナー
きむら ひろふみ
木村 洋文 さん

赤松通り商店街にかまえる「saboribar」には、カフェとインテリア雑貨の他に、ワークショップスペースもあります。ここに地元や都会の人を集め、農家さんによる加工品づくりや工芸教室を開くと面白くなりますね。



細野
まんどころ だいすけ
政所 大輔 さん

週に2、3回ジョギングをしています。道で会った人とは、あいさつを交します。そういった何気ない風景に、都会の人は感動すると聞きました。確かに、子どもからあいさつをもらうと、元気をもらった気になります。

意外とある自分と
農家民泊のつながり

INTERVIEW

都会に認められた小林の魅力。
しかし、農家民泊だけが
小林のおもてなしではないはず。
例えば修学旅行生が来ると知った時、
私たちに、何かできることはあるのか。
清水会長の話からヒントを探る。



北きりしま田舎物語推進協議会
会長 しみず よういち
清水 洋一 さん

都会から求められる、自然と人は宝。 皆で守り、活性化につなげていきたい。

通過型の観光から 体験型の観光へ

小林の活性化のために、人を滞在させる観光の方法を探していた時に出会ったのが、南信州観光公社株式会社の設立に関わった藤澤安良さんでした。「農業を手伝ってもらうのに報酬を

払わず、逆にお金をもらう」という逆転の発想。「これだ。」と思いました。

実際に協議会で民泊を始める時、口蹄疫や新燃岳噴火の際にも受け入れの依頼があり、確信を持ちました。農家民泊は、受入れ農家のやりがいや移住などにもつながり、多くの効果が期待できますが、まずは収益

を上げることが第一。大口の来客が見込める修学旅行誘致は悲願でした。

受け入れ農家の 増加が課題

現在、協議会では、農家の負担を考え、1家庭あたり、1週間に1回しか受け入れをしません。

しかし、中学校の修学旅行は4、5月に集中しているため、現在は、依頼があっても断っている状況。需要はあるのに、それに応えるだけの会員が確保できていません。農業者であれば、誰でも民泊を始めることができます。

農家だけでない 民泊への参加を

現在力を入れているのは、高校の修学旅行誘致。2泊3日で滞在ができるため、他の体験メニューを組

み込めます。トレッキング、川釣りや工芸のインスタクターなど、さまざまな人材が必要になってきます。インスタクターにも報酬が入るので、経済効果が期待できます。

また、都会の人が感動する自然や生活文化、純朴な人柄などを守り続けていくことも重要になってきます。小林の自然、暮らす人が、都会から求められる価値を持っています。皆が小林の宝であることに気が付き、行動すれば、必ず活性化につながると思います。

暮らすまちから 迎えるまちへ

田舎の生活空間は、都会の人にとって異文化を体験できる非日常の空間。私たちがから見れば、「何もない」と思いがちなの土地も、都会の人からすれば、癒しや驚きを与える魅力を持っている。

そして、自然や農作業体験を求めてくる人は、人が会えばあいさつする、悪いことをしたらしかるといって田舎で当たり前のつながりに感動する。

言わば私たちの営みそのものも観光資源になる。これを皆が自覚することで、単に「暮らすまち」から、人を多く「迎えるまち」になるチャンスになるのではないだろうか。

都会にあるサービスや華やかな食事はいらぬ。雄大な自然と、素朴な田舎料理と、純朴で、少し恥ずかしがり屋でやさしい人柄の小林人の気質でもてなせばいい。

そして、都会の人が、そんな人情に触れたとき「小林に、あの人に、また会いに行こう」と足を運んでくれる。

10年後、20年後も「また来てよかった」と戻ってきた人が感動する自然や小林人の気質を残し続けたい。訪れた人を笑顔でもてなせるまちであり続けたい。里帰りの家族を迎えるように、「ただいま」「おかえり」と。

農家民泊、始めませんか

農業者であれば、だれでも農家民泊を開業できます。私たちが申請手続きのお手伝いをします。興味のある人は、一度事務局までお電話ください。一緒に農家民泊を楽しみましょう。



おぐらのりこ
事務局の小倉憲子さんと
なつきふみこ
夏木文子さん

北きりしま田舎物語推進協議会
事務局 Tel. 22-3020

